

# 世界遺産視察

(2005.10.9 ~ 2005.10.15)

## 世界遺産視察その1 ポルトと尾道

広島経済同友会尾道支部 支部長 田中 康貴

ポルトガル大航海時代に、ポルトガル人が種子島に漂着し鉄砲を伝えたのは1543年のことであった。日本史上でヨーロッパの国との最初の出会いはポルトガルであったと言える。ポルトガル文化は日本に影響を与えたと考えられ、ボタン・コップ・カルタ・パン・タバコ・ビスケット・ベランダ・テンブラ・オルガンなど、多くが日本語として残っている。しかし、他のEU諸国と比べ長い歴史的断絶と経済関係の薄さの為あまり知られてない国でもある。

ポルト市は、ポルトガルの首都・リスボンに次ぐ第2の都市であり、ポルトガル商工業の中心地である。人口は21万人であるが周辺を含めると更に増える。古くよりポルト市はポルトワインの発祥の地として有名である。ドウロ川の河口に位置し、ポルトワインの積出港として、また貿易の要所として栄えた。

この度、広島経済同友会尾道支部では世界遺産視察の訪問先にポルト市を選んだ。

それはポルト市が尾道旧市内の景観に非常によく似ているので今後の世界遺産登録推進活動の参考になると考えたからである。まず、世界遺産となっているポルト歴史地区との類似点であるが、対岸のヴィラ・ノヴァ・デ・ガイア地区からポルトを見ると、丘陵に重なるように建物が密集しているのはまさに向島から見る尾道のようなものである。また共に港町として繁栄し、さらに対岸とは橋によって結ばれている。



ポルト歴史地区に足を踏み入るとほとんどが坂道で、細い路地裏は情緒があり昔にタイムスリップしたようである。(古い道はカルサダースと呼ばれる石畳でできている)また、この路地が生活の場となっているのも尾道によく似ている。しかし、尾道にも浄土寺や西国寺等、古いものは残っているが石造のポルトの建物には歴史や規模はとうてい及びもつかないと感じた。



向島から見た尾道に似ている



橋で結ばれている



2号線から見る渡し場に似ている

そのポルト歴史地区内の視察先をいくつかあげると



カテドラルは元は要塞として12世紀に建てられたが、改修を加えられ現在に至る。17世紀に造られた銀の祭壇がある。

グレリゴス教会は18世紀に建てられたバロック様式の教会

ポルサ宮は火災で焼失したサン・フランシスコ修道院の跡地にポルト商業組合の建物が作られたのが1834年である。

サン・ベント駅は20世紀初頭のもので約2万枚のタイルでポルトの歴史が描いてある。

## 世界遺産視察(その2)ポルト市役所訪問

ポルトの市役所はポルト歴史地区を見渡すように堂々とした風格をもって、町の中心に建っていた。

公共交流部長 マニエル カブラル氏と関係者の歓迎を受け、用意された会議室に通された。まるで宮殿のような市庁舎である。残念ながら、ポルト市長選挙があり、前日に前市長が再選



されたということで面会する事はできなかった。亀田市長はカブラル氏に「この度の訪問を受け入れていただきありがたい。世界遺産に登録されたメリット等を聞かせて欲しい。また、ポルト市長の再選おめでとうございます。」と御礼を述べた。広島経済同友会尾道支部の田中支部長は「尾道は世界遺産登録を目指している。ポルトと尾道は景観がよく似ているので視察に訪れた」と趣旨説明をした。



カブラル氏の話は「ポルトは商工業の町である。繊維、靴、コルク、金属、自動車等の工場が町の外側に多くある。ポルトワインで有名だが、「ヴィティニコラ」というワインもイギリス、フランスに輸出され世界的に有名で、それを知って世界の人々が訪れる。

ポルトは1996年に世界遺産に登録されたが、その後ドウロ川上流のコシコアに旧石器時代の1kmに及ぶ岩壁画が発見され、2002年に世界遺産に登録された。この発見によりドウ